

未来の原風景 -居久根の再生に伴う住居施設設計-

Original landscape of the future Residential facility design accompanying the regeneration of Igune

○中村圭佑¹, 小林直明²*Keisuke Nakamura¹, Naoaki Kobayashi²

Contemporary Japanese urban areas became homogeneous cities which lost the region's history, culture and landscape after repeated scrap and build. The artificial environment cut from the climate of the area and made of concrete It is becoming more homogeneous in the lives of the people run in. Although it is Japan where urbanization progresses, coexistence with nature, the intention to continue such activities in the future is to "local areas " I think that it exists.

Miyagi prefecture Sendai city Minami Gamui district, which suffered a massive damage due to the Tsunami associated with the Great East Japan Earthquake The waves of modernization are also raging in this area. In the Minami Gamo family, a house called "Igune" There are people of Minami Gamo living in a dwelling unit integrated with this living , and have been engaged in agriculture coexisting with nature. It is igune who has been handed down this land little by little by a long time , Necessity was lost along with the recent development of housing equipment, but who protected the house from the tsunami at the time of the disaster, useful for disaster prevention and disaster, the necessary value was reconsidered, local residents lost in the tsunami I am trying to reclaim and regain the original landscape of Minami Gamo.

1. はじめに

現代の日本の都市部は、スクラップアンドビルドの繰り返しを経て、地域の歴史・文化・風景を喪失した。世界のどの都市とも見分けがつかないような均質な都市となってしまっている。地域独自の風土から切断され、コンクリートでできた人工環境の中で営まれる人々の生活もまた均質なものになってきている。このように都市化が進む日本だが、“地方”にはその流れから免れ、自然と共生した暮らしがかりうじて残っている。これからは、建築が飽和状態の都市ではなく“地方”に目を向けていくことが重要だと考える。

東日本大震災により、甚大な被害を受けた本計画地である宮城県仙台市南蒲生地区。南蒲生には“居久根(いぐね)”という屋敷林が存在し、南蒲生の人々はこの居久根と一体化した住居に住まい、自然と共生しながら農業を営み暮らししてきた。長い時を経て、少しずつ数を減らしながらもこの地で財産として後世に受け継がれてきた居久根だが、近代化の波が押し寄せ、住宅設備機器の発達や都市化などに伴い必要性が失われかけていた。しかし、被災時に津波から家屋を守り、防災・減災に役立った居久根は必要価値が見直され、地元住民は津波で失われた居久根を再生し、南蒲生の原風景を取り戻そうとしている。

2. 計画背景

2.1 居久根のある集落-宮城県仙台市南蒲生

居久根は屋敷林の一種で、屋敷およびその周辺において、特定の機能を担うべく設けられた樹木と、その集合である。つまり屋敷林は敷地の中に人が利用するために、利用したい場所に植えたものであり自生したものではない。屋敷の中にある樹木で生活や生業に密着した樹木資源であった。特徴はコの字型に樹木を配すこと。岩手や宮城の北西にある山から吹きおろしてくる季節風や風雪を防ぐために北西側に樹林帯を設けたもので主に防風の役目を果たしている。豊富な樹種を有する居久根は人口の里山と呼ばれることもある。



Figure1. Igune

2.2 南蒲生の被害と居久根の減災効果

蒲生地区沿岸部では5メートルを超える津波の到来と同時に、集落の北を流れる七北田川も決壊した。二方からくる波が田園地帯の浮島となっていた南蒲生集落を襲い、南蒲生地区の人々は多くの人命と財産を失うこととなってしまった。被害が大きかった南蒲生であるが、被災後、居久根が減災に役立っていたことが判明した。居久根が瓦礫を引きとめ、その前方あるいは背後の水田に多く瓦礫が分布していた。もちろん完全に瓦礫を引き留めることはできず、さらに瓦礫は東部道路を越える場合もあるが、居久根のある集落の存在によって、ある程度瓦礫を引き留め、さらなる内陸部への瓦礫侵入防止につながったと考えられる。また、居久根があった場合の家屋自体の倒壊も食い止められていて、居久根を有する民家の残存率が高かった。



Figure2. Igune of Minami Gamou 2009/03/31

3. 建築計画

現在南蒲生は、津波による深刻な被害により、居久根のある原風景はほとんど失われてしまっている。居久根が被災前から減少していた要因として、住宅設備機器の発達や都市化の他に、管理面での問題がある。枯れ枝や落ち葉が公道や他の民家を汚してしまったり、枝打ちなどの定期的な手入れが持ち主の負担となってしまうのだ。被災を契機に居久根の価値が見直され、再生を望む声が高まっている。しかし、本計画は被災前の原風景をそのまま再現することを目的としない。現代の暮らし方や、南蒲生が目指すべきこれからの姿を考え、居久根を継承しながら原風景を再構築する必要があると考える。そのために、居久根を個人のものではなく、地域全体の共有財産として継承する。地域の機能として、集会場を設け、居久根によって普通の集落よりも住戸同士に隔たりがある南蒲生に交流の場を造る。また、住戸も従来の日本家屋ではなく、居

久根とより距離の近い暮らしができるように計画する。また、居久根から調達した木材を住居の建て替えに使ったり、落ち葉や枯れ枝を燃料に使っていた頃のような居久根との関わり方を、安全かつ快適に行えるシステム・共同体作りを目指す。



Figure3. Diagram



Figure4. Proposed image-elevation of House model



Figure5. Proposed image-Axonometric of House model

4. 参考文献

- [1]「これまでの3.11 これからの3.11」, 建築知識, 2014
- [2] 菅野 正道:「イグネのある村へ」 2014
- [3]都市デザインワークス:「南蒲生地区復興まちづくり」〈<http://www.udworks.net/works/create/minami-gamo>〉 2017年9月20日アクセス
- [4] 小金澤 孝昭, 海川 航太:「仙台平野の海岸林・屋敷林(いぐね)の災害調整サービス機能」宮城教育大学紀要 2012
- [5] Google Earth